

「ガン」に対する新たな取り組み

(『ジャパン・タイムズ』2013年3月8日掲載)

ガンはさまざまな疾病の中でもとりわけ恐ろしい症状を伴う病気である。

ガン細胞は無秩序に増殖するが、現代医学ではこの現象を克服できていない。

東京・八王子市にある「素問八王子クリニック」院長の真柄俊一医師は、ガンの治療用として広く使われている「抗ガン剤」を使わずにガンの治療を行なっている。

同クリニックは2003年に開業して以来、2,700人以上のガン患者を治療してきており、現在もおおよそ300人の患者が診療を受けている。

真柄医師(74歳)は鍼による治療を行なうとともに、患者に対して「食習慣の改善」や「ガンに対する考え方の改善」のためのカウンセリングを実施している。

その治療法は、米国「UCLAヘルスシステム」の内科医である菅原正博教授からも高く評価されており、教授からは知人の治療を依頼されている。

新潟出身の真柄医師は父もその弟も医者である。新潟大学医学部を卒業後、産婦人科医として働いていたが、50代のとき、慢性ジンマシンを患い、当時最善の治療薬といわれていた抗ヒスタミン剤を長い間服用していた。そのときの体験を今回のインタビューで「一度薬効が切れると、翌日にはまたかゆいジンマシンが出てくるので」と振り返っている。

ある日、健康雑誌を眺めていたとき、「ニンクスープがぜんそく患者に効果がある」という記事を見つけた。ジンマシンも喘息(ぜんそく)もどちらもアレルギー反応であるという理由から、軽い気持ちで自家製ニンクスープを試してみた。すると三週間後には、ジンマシンは出なくなっていた。

真柄医師は興奮気味に語る。

「一片のニンクが現代の医薬品を超えたことに驚き、自然の治癒力の可能性に唖然としました」

それ以来、ニンクの治癒能力について勉強を始め、病気の治療にとって「食べ物がいかに重要であるか」ということに気づく。一例として、現在では患者に対して動物性食品を食べないように指導している。

「研究が進むに従い、人間に備わっている自然治癒力がいかにすごいか、これまで知ることのなかった真実について、少しずつ理解が深まってきました」

やがて彼は、病気を予防し免疫系を強化するためにはリンパ球の能力改善の必要性がある、ということに気づき、鍼灸治療を活用し、免疫系に關与している自律神経に対する治療法を開始する。

「米国では、薬剤の副作用によって年間30万人が死亡している」との研究報告があるが、真柄医師はいくつかの天然植物由来のサプリメント以外、現代医学に基づく薬剤は使用していない。

真柄医師が最も重要視しているポイントは「人々の意識を変えること」にある。

米国の生物学者であり、『「思考」のすごい力』の著者であるブルース・H・リプトン博士は「遺伝子やDNAの働きは人の意識によって変えられる」と述べているが、真柄医師もこの考え方に共感する。

「遺伝子が生物学的機能をすべてコントロールするという考え方は、すでにもう古い考え方なのです」

真柄医師によると、「残されている時間は多くない」と告げられた患者は、衝撃を受け、将来に失望し、症状はさらに悪化していく。しかし、未来に対して希望を持ち、「生きよう」という意志の強い患者は急激に悪化することなく、時には改善に向かうことさえある、という。

真柄医師は、患者とのカウンセリングの中で、全快した人の実例を示すことによって患者が楽観的な気持ちを抱けるよう指導している。

真柄医師の治療法はさらに広がりを見せる。

「最近、数十人の患者さんに対して、最先端の遺伝子検査『CanTect』を実施したところ、こうした治療のあとには、ガン促進遺伝子とガン抑制遺伝子の働きが、治療前より改善に向かって変化したことがわかりました」(訳注) CanTect: 体のガンリスクが遺伝子レベルで評価できるよう開発された遺伝子検査で、ジーン・サイエンス社が開発した。

真柄医師には、『がんを治す「仕組み」はあなたの体のなかにある』(2007年)、『がん、自然治癒力のバカ力』(2009年)、『がんを治すのに薬はいらない』(2012年)という3冊の著書がある。

なお、同様の考え方を共有する医師、学者、食生活アドバイザーなどと定期的に「健康セミナー」を開催、ガン患者が「快適な生活水準」(QOL)を保てるよう情報提供している。「健康セミナー」の次回開催は、4月6日(土)に大阪で予定されている。